

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370968

研究課題名(和文) 朝鮮学校卒業生の世界に関する民族誌的研究

研究課題名(英文) Ethnographic research on the world of Chosen gakkou (Korean schools in Japan) graduates

研究代表者

宋 基燦 (SONG, Kichan)

立命館大学・映像学部・准教授

研究者番号：60636091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：朝鮮学校は、日本最大外国人学校組織である。また、70年以上の長い歴史の中で、朝鮮学校は多数の卒業生を輩出した。しかし、朝鮮学校は今まであまり研究されてこなかった。その理由は、朝鮮学校が置かれている政治的特殊性にある。本研究は、朝鮮学校を卒業した人々に焦点を合わせ、朝鮮学校卒業後、日本社会で暮らしていく彼らの生活世界への理解を試みた。研究結果、朝鮮学校の卒業生は、朝鮮学校の共同体に留まる場合もあったが、概ね日本社会の成員として暮らしていた。また、一部の人は、朝鮮学校での学びを発展させ、トランスナショナルな生活世界を構築していた。

研究成果の概要(英文)：Korean ethnic schools in Japan(Chosen Gakkou) is Japan's largest foreign school organization. Also, in the long history of more than 70 years, the Chosen Gakkou produced a large number of graduates. However, Chosen Gakkou have not been studied so much. The reason is due to the political uniqueness of the Korean school. This study focused on those who graduated from Korea school and attempted to understand their living world who lives in Japanese society after graduating from Chosen Gakkou. As a result of the research, the graduates of the Chosen Gakkou sometimes stayed in the community of the Chosen Gakkou, but in general they lived as members of the Japanese society. In addition, some people developed learning at the Chosen Gakkou and built transnational life world.

研究分野：文化人類学

キーワード：在日コリアン 民族教育 朝鮮学校

## 1. 研究開始当初の背景

日本全国 66 か所に散在し、本研究開始当初、約 9,000 人の在学生在が学んでいた朝鮮学校は名実共に日本で最も大きい外国人学校組織である。これは、朝鮮学校の規模が徐々に縮小している今日も、依然として変わっていない状況であり、これからもしばらく日本最大の外国人学校組織としてあり続けると思われている。また朝鮮学校の教育構成は幼稚園から大学までの体制を構築していて、その大学の卒業生がまた朝鮮学校の教師になる循環的システムをなしている自立型教育組織でもある。朝鮮学校では、民族衣装を制服にし、学校内の日常用語として朝鮮語だけを使うようにするなど、徹底した民族教育を貫いている。このように朝鮮学校だけの特殊な民族教育が可能なる理由には、日本の公教育から分離された閉鎖的自治空間としての「ウリハッキョ(私たちの学校)」の存在があるが、このような朝鮮学校の閉鎖性は日本社会とのコミュニケーションの妨げとなる側面もある。

また、研究当初から現在にも続いている朝鮮学校に対する「高校無償化政策」排除問題、地方自治体からの補助金削除問題、ヘイトスピーチの問題など、朝鮮学校の日本社会における「公共性」を否定する一連の動きが明らかになっている。この背景にあるものとして、日本社会の根強い排外主義も考えられるが、一般の人々が抱いている「中身が見えないものへの不安」とそこから生まれる誤解も無視できない原因であろう。しかし、「国民」ではないが、多くの在日コリアンは日本社会の「住民」という公共圏のなかで日常生活を送っている。現在日本には国際化に伴って多文化共生論が謳われているが、60年以上の歴史の中で、数多くの在日コリアンが朝鮮学校を卒業して日本社会の「住民」として暮らしている現実を目をつぶって真の多文化共生は語れないのである。そして、日本社会における

朝鮮学校の公共性への認識と開かれた多文化共生の未来のために、朝鮮学校の顔と中身を見えるようにするエスノグラフィが必要とされていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、朝鮮学校の教育の実態を理解し、それが日本社会に示唆する意味を長期的な面で明らかにするための人類学的研究として位置付けることができる。本研究の目的は、朝鮮学校卒業生への追跡インタビュー調査と現在の朝鮮学校現場への人類学的調査を並行することによって、朝鮮学校に関する立体的かつ総合的エスノグラフィを構築し、朝鮮学校卒業生の世界と朝鮮学校世界の連続性と非連続性を明らかにすることであった。また、グローバル化に向けて多文化共生論が謳われている中、60年以上の歴史の中で、数多くの在日コリアンが朝鮮学校を卒業して日本社会の「住民」として暮らしている現実をについて、卒業生の生活世界を明らかにすることから問題定義することであった。それは、日本社会における真の多文化共生の意味について考え直すことにもなり、日本社会の成熟にも貢献することを目的としていた。

## 3. 研究の方法

この研究のプロセスは、まず朝鮮学校の卒業生と現時点の朝鮮学校の教育現場に対する人類学的調査によって、10年以上の時間的スパンからなる朝鮮学校に関する立体的かつ総合的エスノグラフィを構築し、さらにそこから朝鮮学校卒業生の世界と朝鮮学校の世界における連続性と非連続性を考察することを目指した。そのため、本研究は学校現場、学校を媒介としたエスニックコミュニ

ティへの人類学的現場研究で、具体的調査手法として参与観察、インタビュー調査などを行った。特に研究代表者による初期の朝鮮学校研究が行われた当時は学生と教師だった人々が、現時点では、それぞれ卒業生と引退教師となっている。この人々へのインタビュー調査には、調査当時撮影したビデオなどの映像資料を活用した映像人類学的調査を行い、朝鮮学校の学生から日本社会の「住民」として生きていく時間的変化を具体的に見せる映像民族誌の制作も試みた。

#### 4. 研究成果

今の日本社会における朝鮮学校に対する批判と偏見の殆どは、朝鮮学校を実質運営している朝鮮総連と北朝鮮との関係に集中している。朝鮮学校の教育が北朝鮮の国民主義的教育内容を踏襲しているにすぎないというものになっている。北朝鮮の在外公民であることを言明している朝鮮学校の教育内容を詳しく見てみると、確かに「国民主義的」と判断できる要素が少なからずあることは明らかである。しかし、本研究の代表者は、以前の朝鮮学校研究(宋基燦 2012)において、朝鮮学校への現場調査を通じて朝鮮学校には「国民主義的教育」に決して包摂されない「自由な個人」の姿も共存していることを発見し、朝鮮学校における国民主義的教育要素が、決して本質主義的なものではなく、二言語に分かれた世界を横断する朝鮮学校特有のアイデンティティ・マネジメントを可能にしてくれる「舞台装置」であると主張し、朝鮮学校の教育実践と日常実践に対して新しい解釈を試みた。

この観点に立って朝鮮学校を分析してみると、朝鮮学校の教育実践と日常実践における集団主義と個人主義の共存や、本質主義に基づいた国家主義言説と脱国家・民族主義的実践の共存のような、一見矛盾しているよう

に見える諸要素が、実は演劇性と二重的言語実践による「現実の生の技法」によって巧みに統合されていることがわかるのである。

本研究もこのような理解に基づいて、さらなる調査研究を進めてきた。まず、現時点の朝鮮学校の教育実践や朝鮮学校を中心に形成される在日コリアンコミュニティへの参与観察からは、このような理解が依然として有効であることを確認できる観察結果が多かった。しかし、以前の朝鮮学校研究の段階より、現在の朝鮮学校の教育実践や日常実践には、「ウリナラ(我が国;祖国)」言説が若干強化されているように見える部分も観察された。これは、朝鮮学校は、常にそのホスト社会である日本社会の「鏡像」をなしてきたことを考えると、この10年余り、日本社会における「国家主義」言説の強化への反応としても解釈が可能な現象であった。

朝鮮学校と総連関連の文献研究では、朝鮮学校に関連して総連と北朝鮮、日本、韓国で発表された新聞と雑誌の記事、また日本の市民団体と個人運動家などが発行している資料などを中心に、朝鮮学校の存在意義と日本社会における公共性に関連した言説を多角的に分析した。ところが、2014年東京都が調査した朝鮮学校調査報告書は、朝鮮学校で使用されている一部朝鮮歴史教科書などにおける問題を指摘して、それを理由に結局自治体からの補助金がカットされた経験をした朝鮮学校側は、非常に内部の教育資料の公開に敏感になっていて、文献研究の大きな妨げとなった。しかし、東京都の調査報告書への反応として、日本社会における朝鮮学校の公共性に関する言及は、朝鮮学校文献から増えつつあることが確認できた。

ところが、このように朝鮮学校により厳しくなった日本社会の雰囲気は、朝鮮学校の生徒や学生、教師の警戒心を高める結果となり、現場調査には以前の調査より自由度の低い調査になった。特に、卒業生への追跡調査は、

SNS等を利用して、追跡自体には問題がなかったものの、それからのインタビュー調査までは、実現することが難しい場合が多数あった。インタビューに応じてくれる場合でも、映像民族誌の撮影となると、撮影への拒否を示すケースが非常に多い結果となり、朝鮮学校卒業生の生活世界に関する映像作品の制作は結局、実現できなくなったのである。

卒業生の進路は実に多様であり、医者や看護師として医療業界で働いている人、朝鮮学校の教員となった人、大学院に進学し研究者の道や教師の道に進んだ人、観光業界で活躍している人、在日コリアン系企業で働いている人、一般の日本企業で働いている人、韓国へ留学したことから韓国を新たな生活の根拠地として、活動している人、などなど、日本社会における住民としての生活は実に多様なスペクトラムを見せていた。なお、このような多様性の中からもお互いのネットワークが非常に発達していて、活発に機能していた。これは、朝鮮学校での経験と学び、そして人脈が日本社会を生きていく上で、現実的助けとなっている側面を物語っていると言える。

朝鮮学校の卒業生の中で、韓国や他の外国を生活の主な舞台として展開している人々の実践からは、研究代表者が以前の研究で主張していた、「柔軟で自由な主体の可能性」を開いてくれる「アイデンティティ・マネジメント」の特徴がよく現れていると同時に、朝鮮学校の経験と学びにおけるトランスナショナル展開の可能性が確認できた。朝鮮学校特有のアイデンティティ・マネジメントとは、二重言語環境の中で国家語と国民国家から始まる抑圧を受け入れながらかわしていくものである。朝鮮学校の日常は使用する言語と空間(場面)によって多重的に表出される。しかし、ここでの空間(場面)は必ずしも固定されるものではなく、対面的状況のなかで、即時に変わるものでもある。朝鮮学校の生徒は、このように言語と空間によって重層的に

展開される世界を自在に横断しながら、即時に自分のアイデンティティを管理していく。これを可能にするのが、言語と空間に基づいて表れる自我の在り方である。これを表にすると次のようである。

<表1.> 朝鮮学校学生の自我の表現

		言語の軸 朝鮮語			
空間の軸		A	B	空間の軸	
		言語の軸 日本語			
学校の内		D	C	学校の外	

- A: 学校空間における「朝鮮語で表現される自我」
- B: 日本社会における「朝鮮語で表現される自我」
- C: 日本社会における「日本語で表現される自我」
- D: 学校空間における「日本語で表現される自我」

これを、朝鮮学校を卒業し、各地でトランスナショナルの実践を積み重ねている卒業生に場合は以下のような表としてまとめることができるだろう。

<表2.> トランスナショナル状況における朝鮮学校学生の自我の表現

		言語の軸 朝鮮語もしくは、現地の言語			
空間の軸		A	B	空間の軸	
		言語の軸 母語(日本語)			
故郷・日本		D	C	現地・世界	

- A: 「日本的」空間における「朝鮮語、もしくは別の言語で表現される自我」
- B: 「他郷的」空間における「朝鮮語、もしくは現地の言語で表現される自我」
- C: 「現地の世界」における母語(日本語)で表現される自我
- D: 「日本的」空間における「母語(日本語)で表現さ

れる自我」  
 以上のような空間の中で、生徒たちの行為は、必然的に「演劇性」を帯びるが、舞台となる「日本社会」と「朝鮮学校」の実在性によって、また、「他国」と「故郷」の実在性によって、彼らの「演技」は「偽り」に落ちることはない。ここから「不真面目な生徒」が浮いてしまう存在となる朝鮮学校特有の「真面目の集団主義文化」が生まれるが、同時に「民族主義」などの真面目な本質主義的レトリックは、二重的言語環境の中で解体されることもあり、結局本質主義の抑圧は無力化される。本研究の代表者は、このプロセスから国民国家のイデオロギーとエスニックアイデンティティを超え、「トランスナショナル・アイデンティティ」へ向かう朝鮮学校のアイデンティティ・マネジメントの可能性を見ている。この部分、つまり朝鮮学校の学びのトランスナショナル展開については、もう少し後続研究が必要性が認められた。このような部分を補強しつつ、朝鮮学校に関するエスノグラフィの第2弾の執筆を計画している。

<参考文献>

宋基燦 2012 『「語られないもの」としての朝鮮学校 在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』岩波書店

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

SONG, Kichan, *Thinking Reconciliation Between Korea and Japan - bones, postcoloniality, and citizen of East Asia* The 65th MCAA Annual Meeting, 2016

宋基燦、2016「在日朝鮮人の社会統合が朝鮮半島に示唆すること」『ポスト統一、南北協力の課題と未来』韓国建国大学統一人文学研究団主催国際シンポジウム

SONG, Kichan, *A History of 'Chousengakkou (North Korean ethnic schools in Japan)' and The Meaning of Its*

*Education*. The 12th ISKS International Conference of Korean Studies, 2015

〔図書〕(計 1 件)

宋基燦、2016 『日本社会と朝鮮学校 恐怖、ヘイトスピーチ、ポストコロニアリティ』人権センター叢書 vol.18 大谷大学人権センター、43頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
 発明者：  
 権利者：  
 種類：  
 番号：  
 出願年月日：  
 国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
 発明者：  
 権利者：  
 種類：  
 番号：  
 取得年月日：  
 国内外の別：

〔その他〕  
 ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

宋 基燦 (SONG, Kichan)  
 立命館大学・映像学部・准教授  
 研究者番号：60636091

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )